

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分  
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時  
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/  
午前 11時40分～午後1時30分  
電話 56-0303 (直通)  
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の  
教頭先生へご連絡をお願いします。

# スマホを中心とした 電子映像メディアと子どもの育ち

～立科中学校PTA講演会より～

立科町教育相談員 岩上起美男

立科中学校PTA主催の「スマホを中心とした電子映像メディアと子どもの育ち」に関する講演会(前半Ⅱ中学生対象後半Ⅱ保護者・地域の方対象)が、今年の5月25日(水)、立科中学校体育館で行われました。講師は、日本小児科医会の常任理事で、「子どもの心」対策部担当の医学博士、内海裕美先生です。

内海先生は、東京文京区で小児科医院を開業され、永きにわたって、医療活動や子育て支援セミナー、子育て相談などを通して、子どもたちの心身の健やかな成長のために尽力されている方です。

さらに、先生は、平成22年10月、立科中学校で行われた立科町青少年育成講演会(演題「子どもの劣化」をくい止めるために)「メディア漬けが子どもを蝕む」の講師、清川輝基氏と共に、「メディア漬け」で壊れる子どもたち(少年写真新聞社発行)を著し、子どもたちの電子映像メディアの接し方についての提言をされています。——6年前の清川氏の講演については、このシリーズでも何度もご紹介しましたが、「乳幼児のころから、電子映像メディアにどっぷり漬かっている日本の子どもは、絶滅危惧種である」という極めて衝撃的な内容でした。詳しくは、ぜひ、昨年の夏、中学生までのお子さんのいるご家庭に配布されました冊子「一緒に考えましょう!

子どもの育ち」(立科町教育委員会発行)をお読みいただきたいと存じます。

このような、小児科医の立場から、情報化社会における子どもの育ちに正面から向き合っておられる方を講師として招かれたことに、立科中学校の保護者の皆様並びに先生方の、「思春期にある中学生の電子映像メディアの接し方」に対する関心の並々ならぬものを感じました。

絶滅危惧種、という清川氏の言葉は、その後も頭にこびりついて離れませんでした。この6年間ずうっと、子どもの情報環境が好転していることを期待しつつ、逆に、より心配な状況に向かっているのではないかと案じていたのです。

と申しますのは、6年前の清川氏の講演ではスマホは全く話題に上っておらず、その前年に発行された先述の著書にも、スマホの「ス」の字もなかったからです。そして、ここ数年のスマホの驚異的な普及を原因や背景として、学校教育の場では様々な生徒指導上の問題が起こっているからです。

そこで、清川氏の講演から6年という歳月が経った今現在の、「小児医療という視点からの子どもを取り巻く電子映像メディア事情」をうかがう絶好の機会と考え、内海先生の講演会に参加させていただきました。

文明の利器であるスマホは、適切に使用するならば、迅速な情報処理や生活空間の拡充、便利で快適な生活など、幾多の恩恵に浴することができそうです。したがって、立科中学校においても、親御さんの細やかな指導と配慮によって、この文明の利器をきちんとコントロールし、有効に活用している生徒が決して少なくないと思います。

しかし、内海先生の講演を拝聴しますと、全体的にはやはり、スマホを中心とした子どもの電子映像メディア事情は非常に心配な状況であり、次のような危惧が頭の中を駆け巡りました。

10数年前、勤務していた中学校で、インターネットの掲示板に、ある生徒の誹謗中傷が書き込まれ、チェーンメールで「不幸の手紙」のように広がってしまった。学校は、その解決のために適切な対応とエネルギーを費やした。関係機関にも相談して対応したが、書き込んだ人物(生徒?)の特定も、誹謗中傷の文言をすべて削除できたかどうかの確認もできなかった。そのため、当時、情報化社会への急激な移行の「影」の部分に構築された不気味な世界と、それを操る得体の知れない何者かに強い憤りと無力感を覚えた。ところが、近年のスマホの普及によって、親や教師の目の届